Google「Deep Review」の知財業務活用ガイド

Googleが公開した「Deep Review」は、長文技術文書の論理的矛盾や記述ミスを自動検出する高度なマルチエージェントAIです。先行技術の「検索ツール」としてではなく、明細書や拒絶理由対応の品質を高める「第二査読者」として、機密性・正確性に配慮した運用設計のもとで活用することが推奨されます。

Deep Reviewの強みと知財業務への適合性

先行技術の「検索」ではなく文書の「論理検証AI」として位置付ける

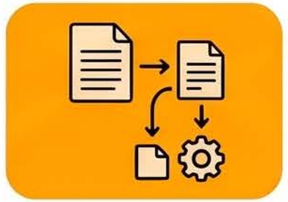


特許DBの網羅的検索機能はなく、明細書や意見書内部の論理矛盾や数値の不整合検出に威力を発揮します。

4段階のマルチエージェント検証による長文解析



文書分割



適応的計算量配分



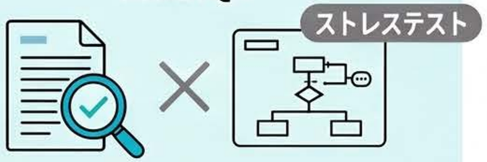
専門エージェントによる並列検証



全体統合と根拠確認

出願前QAや拒絶理由応答（OA）のストレステストに最適

出願前QA



請求項と実施形態の整合確認

拒絶理由応答（OA）



反論ロジック
弱点の事前検出

導入時のリスク管理と推奨運用モデル

リスク管理



Web UI無料版への未公開発明の投入は原則禁止

モデル学習には使われないもののUI表示用に1年間保管されるため、守秘義務や新規性喪失のリスクがあります。



API利用時は「Paid Services」の契約条件を必ず確認

無料API枠（Unpaid）は入力データがGoogle製品の改善や人間レビューに使われるため、機密情報投入は不可です。

推奨運用モデル

「特許検索基盤 + Deep Review + 弁理士」のハイブリッド構成



特許検索基盤



Deep Review
（中間検証）



弁理士
（最終判断）

検索と最終的な法律・技術判断は専門家が行い、
Deep Reviewは中間検証として組み込むのが最適です。

Gemini Notebook